

出身高校による大学生の文化的差異

—京都大学 1 回生調査より—

山口健二（岡山大学）

○保田卓（福岡教育大学）

保田(三家)その（京都大学）

○井上義和（京都大学）

はじめに ¹⁾

今日の大衆教育社会にあって、エリート中等学校の社会的特徴を解明することが、求められるエリート像や能力観、さらには教育と社会の関係を考察するために不可欠である。またその知見なくしては、今後の中等教育と高等教育の連結関係を構想することはできない。こうした問題意識の下に、本研究で

¹⁾ 本研究は、平成 11～13 年度文部（科学）省科学研究費補助金研究プロジェクト「大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究」（研究代表者：竹内洋）の一環を成すものである。

は、京都大学 1 回生調査の結果から、出身高校の種類による大学生の文化的差異、とくに毎年エリート高等教育機関に多数の合格者を輩出している六年制一貫の私立エリート高校の特徴を浮き彫りにしたい。調査は、京都大学の平成 12 年度入学者の大多数を対象とする意図で、各学部のクラス指定科目「英語 I a」の授業中に質問紙を配布・回収した。全 57 クラスのうち、協力不可 6 と実施ミス 1 を除く 50 クラスの協力を得ることができた。調査期間は平成 12 年 11 月 28 日から 12 月 6 日である。また、京都大学の平成

表1 高校類型による諸々の変数の比較対照表

項目	集計			要約			観察結果	コメント
	国公立	私立内進	私立受験	国公立	私立内進	私立受験		
Q29C親学歴	父：大学(院)** 母：大学(院)**	70.9 41.5	<u>80.5</u> <u>57.5</u>	67.4 37.7	++ ++		私立内進組は親の学歴が高い。	国公立と私立の対照的な傾向を示す常識的な結果。しかし同じ私立でも、内進組と受験(編入)組の違いは入学後に効いてくる。
Q1考慮	親・親戚** 学校の先生** 塾・家庭教師**	63.3 <u>48.7</u> <u>37.1</u>	<u>80.9</u> <u>72.0</u> <u>64.1</u>	62.4 30.4 58.5	++ - +		中学受験(私立内進組)は親・親戚と塾・家庭教師を考慮。同じ高校受験でも、国公立は(10下ほど)学校、私立は塾を重視。	
Q26進学実績	(TK進10上)**	<u>75.1</u>	70.1	74.2	--		国公立は地域・実績ともに分散。私立は関西の上位校に集中。	
Q25所在地	(関西5府県)**	<u>39.4</u>	69.2	71.4	--			
Q2A期待	受験準備** 知識教養 尊敬できる先生* 親友 クラブ活動**	57.2 58.9 30.5 81.2 60.0	58.6 56.2 <u>36.6</u> 81.9 <u>57.7</u>	<u>75.6</u> 59.2 30.6 80.2 <u>37.4</u>		++ ++ --	国公立と私立の違いよりも、私立の内進組と受験組の違いが顕著。私立受験組は(10下ほど)クラブ活動を犠牲にして(10上ほど)受験準備に重点が置かれる。他方、私立内進組は受験以外の学園生活もバランスよく充実。	旧制時代の“良き伝統”の実質的継承者は、いまや国公立よりも私立内進組のほう。そしてこれらに挑戦する新興勢力が、大学受験に特化した私立受験(編入)組である。
Q2B実際	受験準備** 知識教養* 尊敬できる先生** 親友** クラブ活動**	<u>64.8</u> 64.8 58.9 87.7 56.3	73.8 <u>70.2</u> <u>66.0</u> <u>92.4</u> 54.4	<u>77.1</u> 61.8 53.9 85.2 <u>28.8</u>	- ++ ++ ++ --	+		
Q5取り組み	受験に必要な授業 受験に不要な授業* 高校以外の勉強 クラブ(スポーツ系)** クラブ(文化系)** 読書** 趣味**	76.8 <u>45.5</u> 56.3 <u>43.8</u> 26.0 39.8 68.6	74.3 38.9 61.1 37.9 30.6 <u>49.2</u> <u>76.8</u>	75.6 39.9 62.3 <u>24.1</u> <u>11.2</u> 35.6 66.0	++ +	- -- ++ ++	国公立は学校の授業とスポーツに熱心な「学校志向」、私立内進組は読書と趣味に熱心な「文化志向」、私立受験組は(10下ほど)クラブ活動に不熱心な「受験志向」(→Q2)。	3つの典型的タイプが対応する。文武両道を標榜する(優等生)、そこから距離をとり独自の活動領域を確保する【文化人】、さらに、それらに背を向けて受験準備に専心する【受験生】。進学校文化は、3類型の占有比率で決まるのかも。
Q4校風感覚	親しみ** 誇り** プレッシャー** 隠したい** 反発**	64.8 <u>56.5</u> 3.5 6.7 18.0	63.4 44.9 8.2 12.9 29.4	<u>39.6</u> <u>33.6</u> <u>11.6</u> <u>22.0</u> <u>45.4</u>	+	-- - + +	在校時の校風感覚は、国公立は(10上ほど)肯定的、逆に私立受験組は(10上ほど)否定的、私立内進組は(10上ほど)その両義的傾向。これは卒業後の母校意識にも反映されるが、全般的に10下ほど絆を保とうとする。	帰属意識は、社会的なまなざしとも深く関係する。国公立は、いまだ“良き伝統”の正統的(精神的)継承者を素直に自認しているようだ。私立には、上位校ほど愛着と抑圧の緊張関係をはらんだ屈折が見られる。
Q3母校意識	(総得点0～5)**	2.41	2.34	<u>1.85</u>		--		
Q29A同窓親族	(いる)**	<u>37.1</u>	20.9	<u>12.4</u>	+	-		
Q6高校以外	(総得点0～5)**	1.35	<u>1.76</u>	1.33		++		
Q9高3夏休み	(一日平均時間)	6.09	6.28	6.00				
Q11京大志望	(高校入学以前)**	<u>8.0</u>	<u>20.5</u>	14.5	-	+		
Q29B京大関係	(総得点0～6)**	<u>1.08</u>	<u>1.38</u>	1.21	-	+		
Q12役立った	(役に立った)**	<u>61.8</u>	70.0	<u>77.2</u>	-		+	
Q13併願校	(ゼロ＝京大のみ)	36.2	41.0	33.5				
Q14東大受験	(合格したと思う)**	<u>26.8</u>	<u>37.4</u>	32.4	-	+		

※ Q1, 2, 4, 5(4水準尺度)は肯定側の割合、Q3, 6, 29B(5項目から複数選択)は出現数の合計。

※ 「観察結果」欄の「10上」「10下」とは、それぞれ東大・京大進学率10%以上／未満を表す。『サンデー毎日特別増刊 2000年版大学入試全記録』より算出。

※ *は $p<0.05$ で、**は $p<0.01$ で統計的に有意。有意差がある項目については、相対的に大きな数値は下線・小さな数値は斜体で示し、さらに高校類型における差異の程度を視覚的に「要約」した。

12 年度入学者数は 2,792 人、回収したサンプル数は 1,829 であるから、その商を「回収率」と見なせば 65.5%である。

1. 学園生活——進学校文化の 3 つの典型²⁾

入学前に抱いていた学園生活に対する期待の程度と、在学中における実現の程度を尋ねたのが [Q2A 期待] [Q2B 実際] である。これに授業や活動に対する熱心さの程度を尋ねた [Q5 取り組み] を併せると、学園生活のスタイルの差異が浮かび上がってくる。

まず [Q2A 期待] [Q2B 実際] より、私立受験組は受験準備に重点が置かれてクラブ活動が低調であるのに対して、私立内進組は受験準備以外の面も充実していることが分かる。この違いは [Q5 取り組み] でも確認できる。すなわち、私立受験組のクラブ活動はスポーツ系／文化系ともに低調であるのに対して、私立内進組は読書と趣味の熱心さが際立っている。私立同士の差異に比べたら、国公立の特徴はせいぜい受験に必要でない科目の授業とスポーツに熱心（≡文武両道）であるにすぎない。

以上の結果から、進学校文化の 3 つの典型的タイプが容易に想起されるはずだ。過不足のないオールラウンド（≡地味）な【優等生】、師友交際に趣味教養と活動領域も多彩（≡欲張）な【文化人】、余計なことは切り捨てて受験準備に邁進する【受験生】、という具合に。そして、3 類型の占有比率の違いが高校類型のあいだの差異として現われるのではないかと。これは仮説としておく。

2. 校風感覚——愛着と抑圧のアンビヴァレンス

在学中に自分の高校に対して抱いていた感情を尋ねたのが [Q4 校風感覚] である。5 項目（親しみ・誇り・プレッシャー・隠したい・反発）すべてに高校類型で有意差が出た。またこの結果を、因子分析によって視覚的に表現してみた（表 2・図 1）。

第 1 因子は愛着的、第 2 因子は抑圧的と解釈した。国公立は愛着が大きく、抑圧は小さい。私立内進組も愛着は大きい、同時に抑圧も大きい。私立受験組になると愛着が減って抑圧はさらに増える。上位校では各傾向がさらに強まることが分かる。

進学校生徒の校風に対する態度には肯定的と否定的の両面があり、それは学校の対外的イメージ（社会的なまなざし）に強く規定される…という一般的な構造までは、容易に察しがつく。だとしても、高校類型のあいだの差異を説明するには、少なくとも各類型の歴史的社会的な背景要因から説き起す必要がある。エリートの意識構造そのものに関する研究

表 2 校風感覚(Q4)の因子負荷量

	第1因子 「愛着的」	第2因子 「抑圧的」	共通性
親しみ	.909	-.112	.838
誇り	.592	-.080	.357
反発	-.541	.365	.426
プレッシャー	-.037	.620	.386
隠したい	-.191	.543	.332
累積寄与率	30.12%	46.76%	

※ 主因子法、バリマックス回転による。

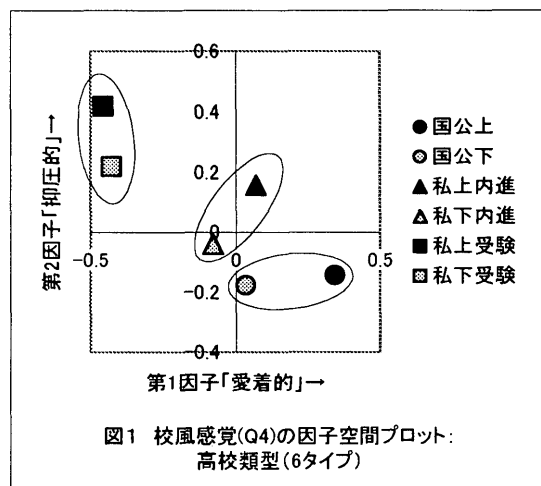


図 1 校風感覚(Q4)の因子空間プロット：高校類型(6タイプ)

もいまだ発展途上であり、立ち入った考察は本来禁欲せざるを得ない。

そのうえで、前節での仮説を敷衍してみるとどうなるか。【優等生】は規範＝建前に素直に順応して愛着的に、【受験生】は現実＝本音を強迫的に先取りして抑圧的に、【文化人】は独自の活動領域を担保に両極から距離をとって（≡板挟みの中で）バランスを保とうとしているのかもしれない。いずれも、現代の受験エリートの適応戦略であるに違いない。

3. 大学受験——先取りと追いつきのタイミング

私立内進組は、学校だけに依存しないのが入学前からの特徴である (Q1)。小中学校の段階で京大志望を決めるものが多く (Q11)、学習資源も塾・予備校を中心に複数组合せて周到に活用する (Q6)。それに対して、私立受験組は受験準備を重点課題とするだけに、学校への依存度が高く (Q12)、塾・予備校の利用は少ない。国公立は高 3 以後に京大志望を決めたものが上位でさえ過半数を占めており、学校の授業も受験対策としては頼りない。

受験エリートとしての現実＝本音を最も先取りしていたのは、実は【文化人】であった。先取りが早かったために距離化戦略もとり得た。【優等生】は最も遅れてきて高校後半からようやく追いつきを開始。両者とも、学園生活をそれなりに謳歌できたので愛着的な校風感覚をもてたのである。ところが【受験生】は遅れて先取りに、早くに追いつき態勢に入っ

²⁾ 本節から第 3 節までで述べる結果は、とくに断らない限り表 1 を参照されたい。

てしまったために学園生活を謳歌する余裕はなく、校風感覚は抑圧的にならざるを得ない。(井上義和)

4. 進学校の「ハビトゥス」

では、こうした進学校文化の3類型は、それぞれどのような「ハビトゥス」をもつのか。それを本研究なりに操作化した項目群が、高校在学中および現在の趣味、現在の価値観、ならびに将来展望である。

趣味 [Q15 趣味]では、「旅行」「音楽鑑賞」など、一般によく趣味として挙げられるものを、高校在学中および現在にそれぞれ趣味としていた(している)かどうかを問うている。個別の趣味では高校類型や東大・京大進学率による一貫した解釈の可能な傾向は見られなかったため、この項目の総得点(例えば[Q15-1 旅行(国内)]で「あてはまる」と答えていたら1点とカウントし、それを、[Q15-17 その他]を除く計16項目について合計した値)を算出して分散分析を行った。これに現在趣味に費やす時間や費用(Q16)の分析結果も併せて示したものが表3である。私立内進組は、高校在学中の趣味の数や現在趣味に費やす時間が相対的に多く、現在の趣味の数や趣味に使う費用も私立受験組とともに国公立よりも多い。高校在学中の結果にも、私立内進組の【文化人】ぶりが顕れていると言えるかもしれない。また現在で私立受験組が趣味に比較的熱心なのは、中学・高校時代の反動と捉えられなくもない。

価値観 現在の回答者自身の価値観を問うたのが

[Q19]である。質問紙では13の項目を用意し、それぞれ「とても大切だと思う」から「あまり大切だと思わない」の4水準尺度で評定してもらったが、変数の要約のために因子分析を施した。最初の分析で共通性の低かった3項目を除外し、残った項目の累積寄与率および回転後の因子負荷量・共通性は表4の通りである。さらに、サンプル毎の因子得点を従属変数とし、高校類型・東大京大進学率(10%以上/未満)・父学歴・母学歴を独立変数として分散分析を行った。

主効果はほとんど有意ではなかったが、注目すべきは高校類型と父学歴の交互作用である(図2・図3)。もとの設問(Q19)は大学1年生現在での価値観を問うたものであるから、父学歴の差異が種類の異なる高校を経ることによって発現したことになる。個別に見ると、「自由志向」(図2)では、父学歴が《大学(院)》(＝大学・大学院)の場合は高校類型による差が小さいのに対し、その水準から見ると《初中専短》(＝義務教育・高校・短大・高等専門学校・各種専門学校)では私立内進組と国公立組がちよと逆の傾向を示している。父学歴が《初中専短》の場合、「自由志向」は、国公立の高校を経ていれば低く、私立の中・高をエスカレーターで通過していれば高くなっている。また「審美志向」(図3)では、国公立組では父学歴による差はないが、私立では父学歴が《大学(院)》の方が高く、しかも私立内進→私立受験の順で乖離が広がっているように見える。解釈は困難で

表3 高校在学中および現在の趣味と高校類型との関連

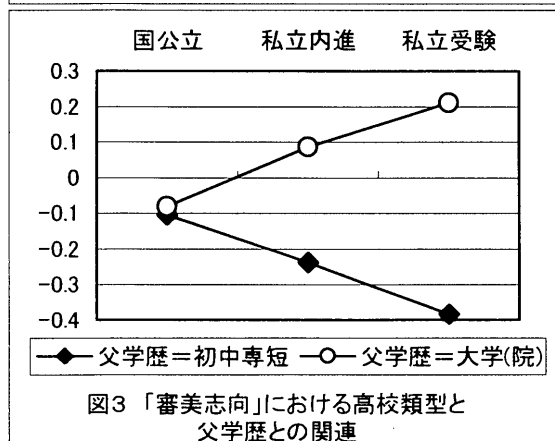
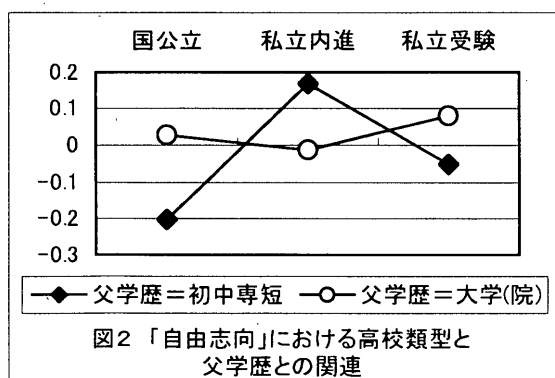
	国公立(A)	私立内進(B)	私立受験(C)	多重比較
Q15趣味(高校総得点)	4.33	4.95	4.57	B>A
Q15趣味(現在総得点)	5.06	5.63	5.60	B,C>A
Q16現在趣味時間(時間/週)	11.96	14.65	12.84	B>A
Q16現在趣味費用(円/月)	8585.44	11258.61	11398.31	B,C>A

※ 多重比較はRyan法による(p<.05)。また、有意差がある項目については、相対的に大きな数値は下線・小さな数値は斜体で示した。

表4 価値観(Q19)の因子分析結果(因子負荷量と共通性)

	第1因子 「出世志向」	第2因子 「社会志向」	第3因子 「自由志向」	第4因子 「審美志向」	共通性
出世して高い社会的地位を得ること	.771	.063	-.027	.022	.599
能力を高く評価されること	.588	.201	.066	.108	.403
人を動かす力を持つこと	.483	.296	.062	.089	.333
人の気持ちを思いやること	.083	.644	.001	.098	.431
社会をより良い方向に変えていくこと	.169	.523	-.047	.163	.331
やりがいのある職業につくこと	.259	.483	.149	-.014	.323
自分の興味や関心を追求すること	.008	.133	.757	.101	.601
自由気ままに生きること	.060	-.063	.560	.170	.350
何事にも美しさを追求すること	.168	.026	.125	.647	.463
芸術をたしなむこと	-.021	.254	.198	.573	.432
累積寄与率	13.08%	24.48%	34.23%	42.64%	

※ 主因子法、バリマックス回転による。



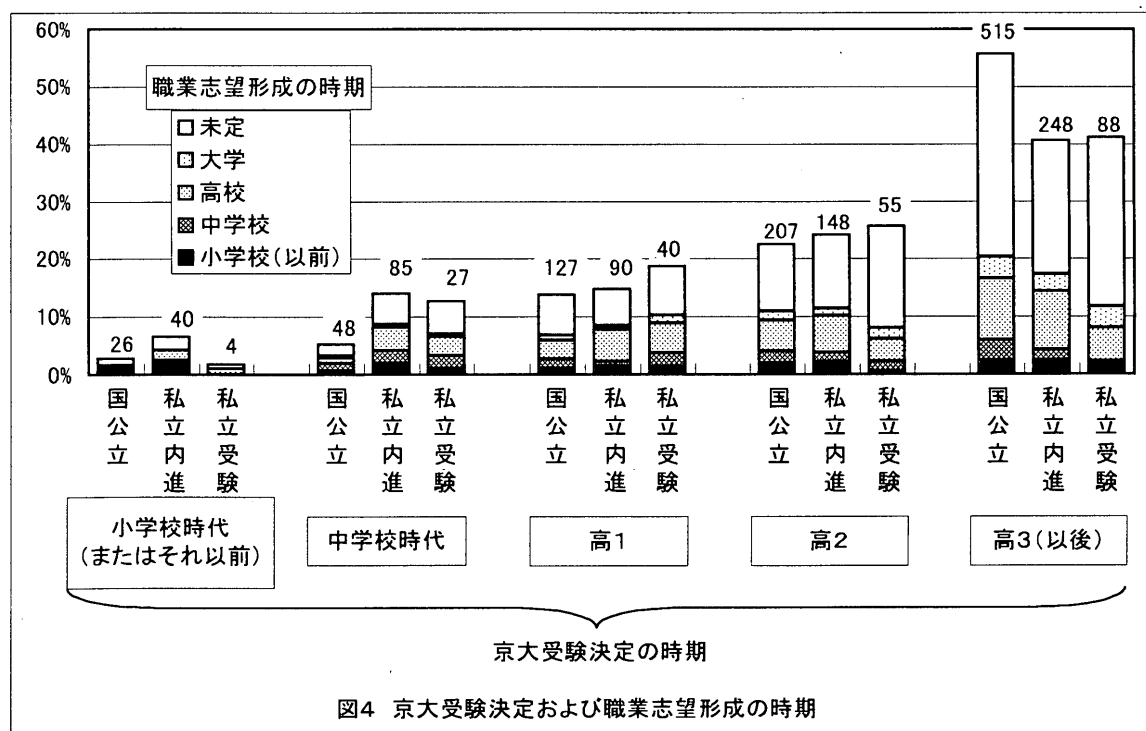
あるが、少なくとも「自由志向」について一つ言えるのは、父学歴が《大学(院)》の者の「自由志向」は安定しているのに対し、《初中専短》の方は学校文化によって影響を受ける不安定なものだということである。高校受験を免れる私立エスカレーター校は「自由志向」を助長し、【優等生】的な国公立は自由に対して禁欲的な心性を育むのかもしれない。

将来展望 将来展望としては、[Q17]で「将来つきたい職業」を決めているかどうか問うている。調査時点で「決めている」者は私立内進→国公立→私立受験の順で多く、とくに東大京大進学率10%未満でその傾向が顕著である(表5)。さらに、決定時期

表5 調査時点での職業志望決定率

東大京大進学率	国公立	私立内進	私立受験
10%以上	46.80%	49.80%	41.40%
10%未満	42.60%	49.20%	27.80%

(Q18)も高校類型間で差異が見られる。これを[Q11京大志望](京大受験を決定した時期)とクロスさせたのが図4である。いちばん目につくのは、中学校時代に京大受験を決めた者が国公立高卒より私立高卒で多く、また高1・高2でも若干その傾向が見られる一方、国公立組は高3(以後)で京大受験を決定した者が多いことだ(棒グラフの高さに注目)。さらに棒グラフの“内訳”(職業志望形成の時期)を見てみると、少数ゆえ確たることは言えないが、私立の方が国公立よりも早くに将来つきたい職業を特定している傾向があり、とりわけ小学校時代(またはそれ以前)から職業志望を固めていた者は、これまた少数ながら、私立内進組で全般に多くなっている。私立内進組の大多数は中学校進学時に受験するため(例外は小学校からのエスカレーター)職業志望の形成もそれ以前になる者がいるのは自然だが、私立全体で見ても、受験大学の決定と職業志望の形成はかなり連動していることがわかる。(保田卓)



※ 棒グラフの上の数値はそれぞれのサンプル数。